

第 5 回

早期発見にトレッタが役立った尿管結石閉塞の一例

ネコの腎結石、尿管結石は若齢でもしばしば見られ、尿管を閉塞すると重篤な腎障害を引き起こす。一方で、腎臓は左右に2つあることから予備能力が高いため、片側のみの障害では目立った症状を示しにくいことも多い。今回、尿管結石による片側尿管閉塞がトレッタデータの活用により早期発見、早期治療につながった症例を経験したので紹介する。

【症例】

<プロフィール>

猫 去勢手術済みオス 6歳8ヶ月齢 日本猫

FIV/FelV 陰性 既往歴なし 完全室内飼育 多頭飼育 (3頭)

<経過>

トイレシートに明らかな薄い尿を発見したため飼い主様がトレッタにて記録されている排尿動画を確認され、当該猫が検出された (図1)。

当該猫は活動性ならびに食欲の低下が認められなかったものの、トレッタデータを見返すと約2週間前からの体重減少、一日総尿量の増加が見られた (図2)。

発見日のうちにかかりつけ医を受診され、片側尿管閉塞による急性腎障害と診断された。

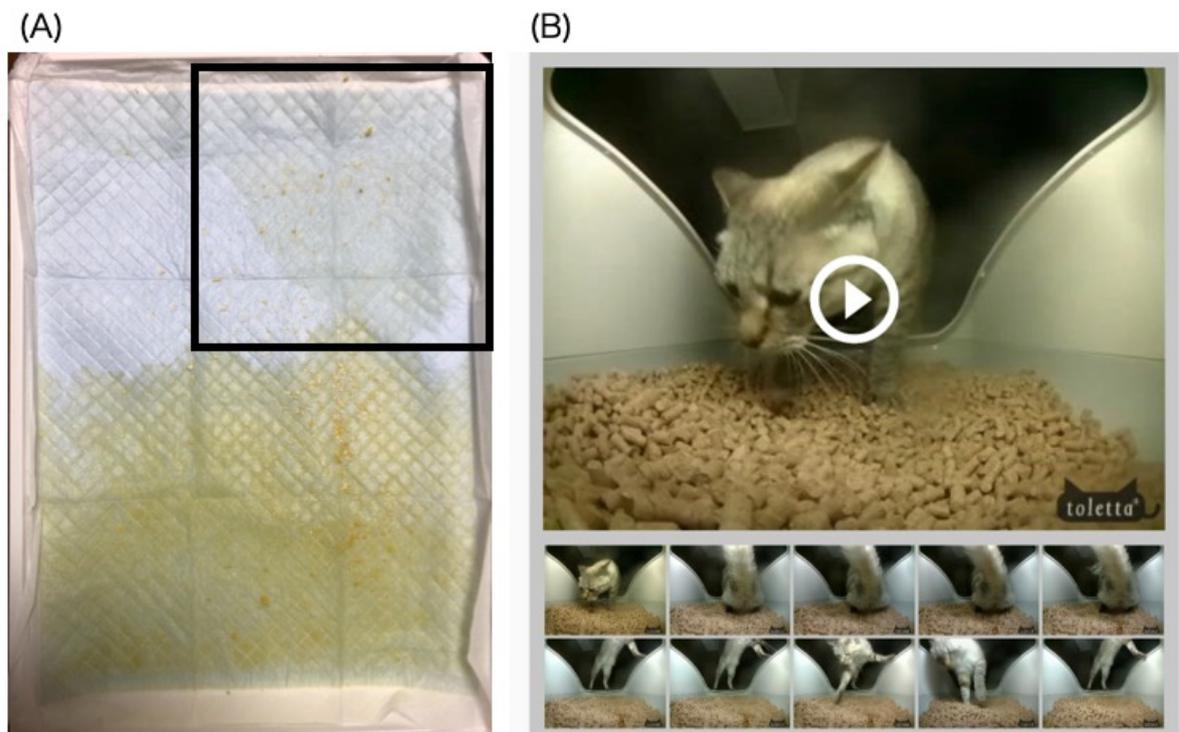


図1 (A)トイレシート上の希釈尿 (B)排尿の様子が確認できるアプリ上画面

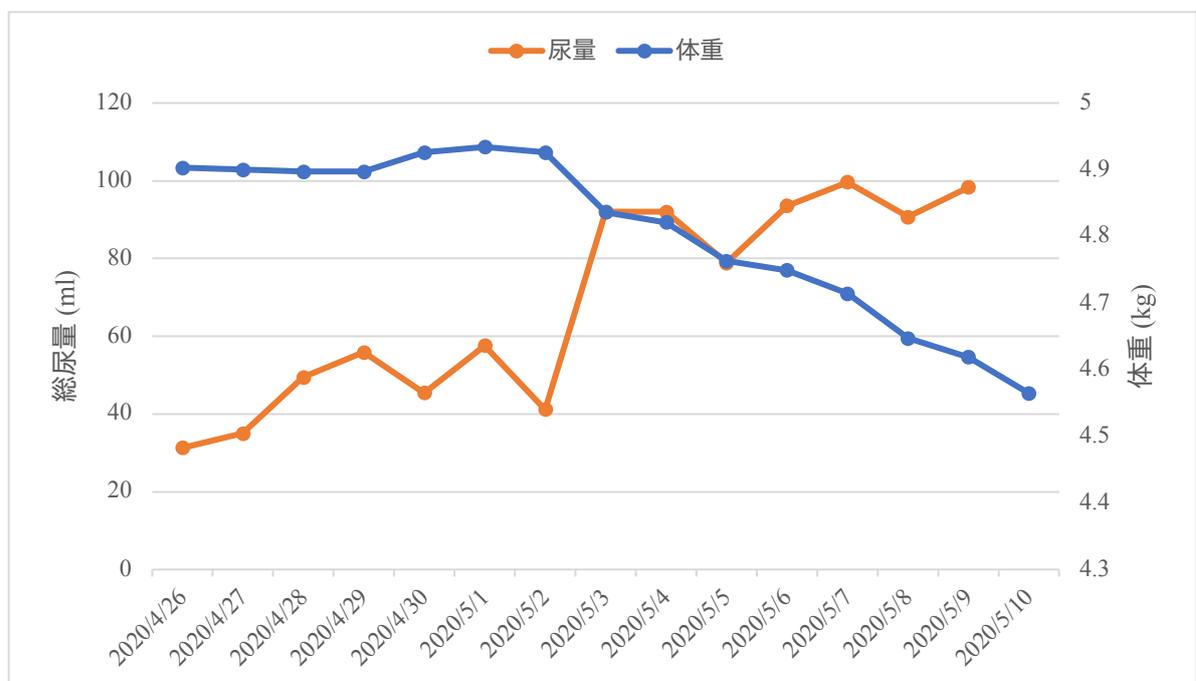


図2 トレッタによる体重、総尿量データの推移

その後、本症例は北里大学獣医学部附属病院に転院しシンチグラフィ検査において残存腎機能は23%程度と推定されたが、外科的介入が必要との判断より尿管膀胱吻合術による尿管再建に至った。

術後、腎数値は順調に低下し、245病日の現在でも血液検査上明らかな異常が見られないレベルにまで回復した（図3）。

	CRE (mg/dL)	BUN (mg/dL)	P (mg/dL)	Ca (mg/dL)	SDMA (μg/dL)
第0病日	6.12	83.7	6.1	11.9	—
退院時	1.64	24.6	2.7	10.6	—
第245病日	1.4	23	3.9	10	14

図3 血液検査での腎数値経過

【考察】

本症例のように臨床症状があまり発現していない段階での片側尿管閉塞の発見は従来困難と考えられてきた。しかし、トレッタデータの活用により体重減少および尿量増加の検出、多頭飼育における排尿個体の識別が可能になり、より早い段階での発見が望めるようになった。本症例はその後、良好な予後を送ることができており、早期での発見とそれに繋がる早期の適切な治療が功を奏した結果と考える。また、本症例では非閉塞側腎臓でも障害があったと考えられ、今後はそういった異常も早期発見できるようデータ蓄積や精度向上が期待される。これらのことより飼育猫の家庭内での体重や尿量などの基礎データを継続的に把握することができるIoTデバイスの活用は健康管理や疾患の発見に効果的であると考ええる。

トレッタキャッツ所属獣医師の長谷川です。今後も、定期的に動物病院の皆様のお役に立つようなレポートをお届け致します。トレッタデータからの傾向分析やトレッタデータを用いた症例報告などを発信してまいりますので、今後ともよろしく願いいたします。

また、動物病院様との連携を通じて様々な疾患や治療経過をトレッタデータと紐付けて分析し、適切な治療の評価、精度の高い分析を行っていきたいと考えております。

より良い獣医療を目指すため、今後とも皆様とともに協力させていただき連携を深めていければ幸いです。

今回のレポートに対する感想やご意見、今後の分析テーマへのご要望などございましたら是非お聞かせください。

【アンケートのお願い】 メールにアンケートフォーム URL がございますので、そちらよりご回答をお願いいたします!